

グリーフケアとしての葬送儀礼 悲嘆と共に生きる遺族を支える

本コラムの執筆を担当してから一年が経過したが、肝心の自身の日頃の主な役目について触れていなかったため、今回は葬送儀礼について触れてみたい。なお、これから紹介する内容には地域差があり、また、宗教・宗派、それぞれの宗教者によって手順や内容・趣旨が異なることをあらかじめおことわりしておく。

僧侶としての私の葬送儀礼との関わりは、枕経といわれる法要から始まることが多い。お亡くなりになった後、葬儀社や遺族から連絡があり、自宅やセレモニーホールに向く。出向いた先で読経し、故人の死後の安穩を遺族と共に祈った後、葬儀日程の調整などしつつも、遺族に対して看病の苦勞などを労い、故人の最期の様子や人柄などをできる限りお聴きするようにしている。その情報は、戒名や説教内容に極力反映させる。後日齋場に向き、亡くなった方を荼毘に付す（火葬する）にあたっての読経をする。当日もしくは翌日以降、通夜の法要を執り行い、その際に仏弟子として守るべき戒律を述べ、それを守っていただく証として仏弟子名（戒名）の書かれた血脈を授与する。通夜の際には遺族の死別悲嘆の軽減につながればと通夜説教をするが、その中には、故人の人柄などを共有したり、その後、遺族にあらためて故人を偲んでいただく時間を提供すべく、御詠歌をお唱えしてから退室している。翌日葬儀において引導法語をお唱えし、仏の世界に導く儀式を務め、その後適宜納骨を行っている。これらの葬送儀礼の後、後日、初七日や中陰（四十九日）、一周忌、三回忌などの機会に追善供養を行う。

近年、直葬や一日葬と呼ばれる現象が出てきたり、葬送儀礼の短縮化、簡略化が進んでいる。そしてその流れはコロナ禍によって加速している。そのような中、私は「継続的にかかわることが可能」であるという仏教僧侶の立場を踏まえ、真にグリーフケアとなり、仏教教義の敷衍にもつながる葬送儀礼を執行すべく、学びと実践を進めたい。

行事アルバム

「迎え火・送り火萬灯会」(八月十三日・十六日開催)



心理学者の相川充は葬送儀礼の働きとして、①死別の現実を遺された者が実感する機会、②遺された者に「自分はひとりではない」と感じさせてくれる機会、③故人への思いや悲嘆の感情を公に表現する機会、④遺された者が故人の人生を振り返り、故人との関係において自分自身を見直す機会の四つがあると述べているが、葬送儀礼においては、僧侶はこれらの①〜④の機会を遺族が得るお手伝いをするのが求められるのではないか。

寺院生まれの子弟が得てして言われるのが「おまえの家は人が死ぬと儲かる」といったからかいの言葉である。また、世間からは「葬式仏教」などと、現代の仏教教団や僧侶を批判する声も聞こえる。そこには、葬送儀礼を商業主義的に、また、単に慣行として行っているのではという世間の疑念があり、また、遺族が求めるグリーフケア（死別悲嘆のケア）につながらない葬送儀礼が行われているのではとの疑念もあるのではないか。さらには、仏教教義と葬儀実践の間に乖離があることについての指摘もある。僧侶である大河内大博は、『グリーフケア入門〜悲嘆のさなかにある人を支える』（編著：高木慶子／勁草書房）において「継続的にかかわることが可能な仏教僧侶が、儀礼を通して家族・親族間の交流の場を紡ぎ、語りへの真摯な傾聴と寄り添いを実践することで、遺族が悲嘆と共に生きる歩みをサポートし、その証人となっていくことができれば、グリーフケアの場は飛躍的に広がりを見せる」と述べている。私たち僧侶は、これらの実践とサポートができていくのかどうかを問われているように思う。また、大河内は同書において「遺族が自らの悲嘆に向き合う数々の儀礼の場で、その場を司る仏教僧侶が単なる儀礼担当者として振る舞うだけでなく、グリーフケアの視点を持って、長期的にかかわる姿勢を持ったならば、葬式仏教という評価ではない、生きた仏教として再評価されることにもなる」とも述べている。

「奉納パフォーマンス 泉邦宏ソロライブ」(八月七日開催)

